

## シェレメーチェフ家の農奴劇場（1775～97年）におけるトラジェディ・リリック上演の試み

——領主ニコライとパリ・オペラ座の音楽家イヴァールの往復書簡を手がかりに——

森本 頼子

ニコライ・ペトロヴィチ・シェレメーチェフ伯爵（1751-1809）が中心となって運営したシェレメーチェフ家の農奴劇場（1775～97年）が、トラジェディ・リリックのロシア語上演を行なったことは、これまでほとんど注目されてこなかった。トラジェディ・リリックは、オペラ文化の黎明期にあったロシアでは、宮廷劇場を含むあらゆる劇場でまったく上演されておらず、また世界的にみても、この取り組みはごく珍しいものであった。本稿の目的は、この取り組みがいかなるものであったかについて、領主ニコライとパリ・オペラ座の音楽家イヴァール（生没年不詳）の往復書簡を手がかりとして解き明かし、この劇場のオペラ上演活動について再考することである。

往復書簡を分析した結果、この劇場では、1784年から91年にかけて、トラジェディ・リリックをめぐる数々の試みがあったことが明らかになった。ニコライのトラジェディ・リリックに対する関心が年を追うごとに高まってゆき、多くの作品が積極的に輸入された。また、ニコライ主導のもとに、上演の準備が周到に進められ、相当な労力をかけてロシア語による上演を実現した。最終的には、トラジェディ・リリックと同じ性格をもつオーダーメイドのオペラ創作が試みられた。そして、一連の取り組みからは、ニコライが、オペラ上演に対して、音楽性、スペクタクル性、祝祭性を求めるとともに、話題作を上演することにこだわりをもっていたことが推察された。

トラジェディ・リリック上演の試みは、オペラというジャンルへの強い志向性をもった、オペラ劇場としてのこの劇場の姿をあらためて浮かび上がらせるものであるとともに、この時代のロシアで、貴族を中心として、19世紀のオペラ文化の開化を受け入れる素地が形成されつつあったことを示すものである。